

不治の病を患って気づいた 「おかげさま」の心

松阪教会 池山記代さん

平成29年3月、池山記代さんはALS（筋萎縮性側索硬化症）と診断された。手足や喉などの筋力が低下し、最終的には呼吸不全に陥る根治のための治療法が確立されていない不治の病。だが、池山さんは延命処置をせず、天地の道理に命を任せて、最期の日まで精一杯生きると決めた。幸いなことに、親身になって支えてくれる人たちに囲まれている。家族との何気ないふれあいや、仲間たちと仏教の教えを実践するといういつもと変わらぬ日々を過ごしている。それでも、死が少しずつ迫っていると感じたとき、病の身になってからの自分を振り返った。今日が人生で最後の日だと受けとめるからこそ、目の前の人や出来事、すべての出会いを大切にできる。不自由なことが増えたからこそ、だれもがやさしい心をもっていると気づけた。そのとき、池山さんはさまざまなことを教えてくれた病に対して「ありがたい」と思えたという。



「自由自在」に生きる

私たちは、自分の思うままに行動できることを「自由」といい、それが「自在」な生き方だと思っています。そして、多くの人が「自由自在に生きられたら、どれほど幸せだろう」と考えます。別の見方をすれば、私たちが日ごろ、いかに不自由や不満を感じているかということなのです。

ただ、ある意味ではそれは当然のことです。自分の思いどおりにできることが「自由」だと思っていると、ままならない現実にはぶつかるたびに不足や不満、苛立ちや苦しみを覚え、不自由な思いが募るからです。これは、「自由」を求めながら、逆に不自由を招いているといえますが、不自由を感じるようなときこそ、ほんとうの意味の「自由」で「自在」な生き方を身につけるいい機会かもしれません。

仏教では、欲にとらわれたり、自分の考えにこだわったりする心がすつかりなくなることを「遊戯」といい、そうした何ものにもとられない心のありようを「自由自在」ととらえています。思い煩いもなく、気持ちのびのびとして安らかな境地です。

また「自在」には、観世音菩薩を観自、在菩薩と呼ぶように、苦しむ人びとの声を聴いて、意のままに救うはたらきや力という意味があります。つまり、人さまを思いやり、人さまとともに向上をめざす生き方のなかに、ほんとうの「自由」があり「自在」があるということです。